

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：17701  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22520534  
 研究課題名(和文) 多文化間プロジェクト型協働学習における相互行為とその影響・効果に関する研究  
 研究課題名(英文) Research on the interactive behavior of students in the collaborative learning of the multicultural project type and its effects and results  
 研究代表者  
 中島 祥子(NAKAJIMA SACHIKO)  
 鹿児島大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：80223147

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学教育の中で日本人学生と外国人留学生の間に「多文化間環境」を創出し、地域理解や文化理解を目的として日本人学生と外国人留学生の混成グループに対して行われた「多文化間プロジェクト型協働学習」の実践について分析・考察を行うものである。「多文化間プロジェクト型協働学習」では、参加者の居住する地域への理解や互いの文化への理解が促進されただけでなく、地域や互いの文化に対する認識の変容、視野や関心の拡大などの変容が見られた。また、学習への意欲の喚起や情意面での効果、日本語能力の向上、協働的・体験的活動の意義への認識などが見られた。

研究成果の概要(英文)：This research analyzes and considers the practice of ‘the collaborative learning of the multicultural project type’, which creates ‘a multicultural environment’ among Japanese and foreign students in university education and aims to encourage the students to understand Japanese local society and their culture. In this ‘collaborative learning of the multicultural project type’, students’ understanding of Japanese local society and their culture was promoted. In addition, it was observed that students’ recognition of Japanese local society and their culture had changed, and that their perspective and interest had expanded. Moreover, it was also observed that the interactions between students had great affected their motivation for learning and their emotion, improved their command of Japanese language, and enhanced their recognition of the significance of collaborative and experiential activities.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：(1) 異文化理解 (2) 異文化コミュニケーション (3) プロジェクト型学習 (4) 協働学習 (5) 多文化クラス (6) 日本人学生 (7) 外国人留学生 (8) 相互作用

## 1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、外国人留学生（以下「留学生」）対象の「日本事情」や「日本文化」などに関するクラスの中に、留学生だけでなく日本人学生も参加するという「多文化クラス（混成クラス）」が増加してきた（土屋 2000、徳井 1997 等）。また、「異文化理解教育」や「異文化コミュニケーション」などに関する科目の中にも、留学生と日本人学生がともに学ぶクラスが増えている（梶原 2003、奥村 2005 等）。さらには、正課外の活動として、異文化間交流や協働的活動を目指した例として加賀美（2001）や末松・阿栄（2008）等が挙げられる。これらの試みは国際化の推進や多文化共生社会を担う人材育成を目指す大学教育において、「多文化間環境」を創出するものとして大いに意義があると思われる。

しかし、実際に大学内での多文化間環境の現状を見てみると、例えば鹿児島大学の場合、留学生数は全体で 300 人を超えているものの、学部留学生に限り各学年の留学生数を見てみると（6 年制の学部の 5、6 年生は除く）、8 学部合わせても 20 名前後となっており、1 学部あたり平均 2 名～3 名の留学生しか在籍していない。また、海外の学術交流協定大学からの短期交換留学生は増加しているものの、留学生と日本人学生が接触する機会は多いとは言えない。

この点では、加賀美（1999、2006）も、接触の少ない留学生と日本人学生を接触させるための「教育的介入」が必要だと説いてい

<sup>1</sup> 加賀美（2001）は「教育的介入」を、「一時的に不可避な異文化接触体験を設定することで組織と個人を刺激し、学生の意識の

る。加賀美（1999）は「大学コミュニティ」の中に、日本人学生と留学生の「異文化間交流」を「教育的介入」により整備することが必要であると説き、さらに、「異文化間教育に係わる者が日本人学生との協働活動を前提とした教育的介入を行うことで、ステレオタイプをうち崩すことができるような交流の場を大学コミュニティに設定することが必要である」と述べている。

一方、大学教育の中では、従来の教師主導の授業から、学生参加型の「協同学習」<sup>2</sup>の重要性が指摘されるようになってきており（ジョンソン他 2001）いる。ジョンソン他（2001）及びジョンソン他（2010）などにより、「協同学習」に不可欠な要素をまとめると以下ようになる。それは、①互恵的な相互協力関係（共通の目標に向かい、対等な立場でお互いに役割を担う）、②対面的で促進的な相互交流（学生同士が顔を合わせて励ましあう）、③個人のアカウンタビリティ（課題を遂行する上で、貢献する責任を公平に負担する）、④グループ内での対人技能（信頼し合い、意志の疎通を図り、お互いを受入れ、前向きに対立を解決する）、⑤グループの改善の手続き（グループの取り組みを反省し、メンバー全員にフィードバックをして、改善を図る）などである。また、池田・館岡（2007）は「日本語教育における協働について重要となる要素」として、「対等」「対話」「創造」の 3

変容を試みる行為」と定義している。

<sup>2</sup> 本稿では用語として「協働」を用いるが、ジョンソン他（2001）での「協同」の他に「協調」という用語も見られる。「協働」以外の用語については、ここでは引用している文献の表記に従う。

要素を挙げ、さらにここに「協働のプロセス」と協働主体間の「互惠性」を加えている。

末松・阿栄 (2008) は、課外活動として「異文化間協働プロジェクト」を実施し、日本人学生参加者についての分析を行っている。異文化間の相互行為をエスノメソドロジーの視点から分析したものとしては、西阪 (1997)、河野 (1999)、吉川 (2001)、杉原 (2003、2007) などがあり、その中で、大学教育の中で行われた日本人学生と留学生の相互行為を分析したものに杉原 (2007) がある。杉原 (2007) は、日本人学生・留学生参加の大学の授業の中でグループディスカッションを行い、両者の相互行為について母語話者と非母語話者としての非対称性と権力作用に注目し分析を行い、「微細な権力作用の及び非対称な関係性を変革していく」ための具体的な示唆を行なっている。「多文化共生」を推し進めるためには、このような「非対称な関係性を変革」していくという視点が不可欠だろう。

## 2. 研究の目的

本研究の代表者は在籍大学において、留学生対象の日本語・日本事情科目を担当する一方で、教育学部国際理解教育専修の学生に対する教育も担当している。留学生と日本人学生の接触する機会が限られることから 2004 年度より、本学の日本人学生と留学生が混成グループを作り、グループごとに目的を持って鹿児島市内をフィールドワークするという授業、すなわち「多文化間プロジェクト型協働学習」を実践している。

この授業の目的は、留学生と日本人学生の接触場面を創出し、プロジェクト<sup>3</sup>を「協働的」

---

<sup>3</sup> 本稿では、「プロジェクト」を倉八 (1993) の「プロジェクトワーク」の定義を参考にし、「学習が学習者同士で話し合い、テーマや目的を決め、計画を立て、実際に学外で資料収集や情報収集、インタビュー調査などを行い、

に行うという目的のほかに、ともに市民として生活している「鹿児島」についての地域理解・文化理解を深めることにある。また、この「多文化間プロジェクト型協働学習」には次のような特徴がある。すなわち、[1]日本人学生と留学生の混成グループで活動する、[2]参加者には一律に単位が認められる、[3]グループごとに鹿児島を理解するためのフィールドワークのテーマを定め、テーマに沿った見学調査を計画するために打ち合わせを 4~5 回行う、[4]鹿児島市内で 1 日フィールドワークを行い、その成果をグループごとにパワーポイントにまとめ、口頭発表する、[5]最終的に個人でレポートを作成する等である。

そこで本研究では、2010 年度及び 2011 年度に実施した「多文化間プロジェクト型協働学習」において、留学生・日本人学生参加者から提出された様々な資料と相互行為について分析を行い、両者に与える影響と効果を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

まず、先行研究の収集及び分析の理論的枠組みの探索を行い、「多文化間プロジェクト型協働学習」の計画と準備を行った。次に 2010 年度と 2011 年度のそれぞれ後期 (10 月~1 月) に、「多文化間プロジェクト型協働学習」の授業を日本人学生と留学生を対象に実施した。それぞれの参加者は、2010 年度は日本人学生 15 人、留学生 7 人の計 22 人、2011 年度は日本人学生 14 人、留学生 14 人の計 19 人であった。また、授業では、1 グループ 3~4 人からなる留学生と日本人学生の混成グループを作成し、グループごとにフィールドワークの準備のための打ち合わせを行う。グ

---

作業の過程を一つの制作品 (発表、レポートなど) にまとめる共同作業形態の学習活動である」とする。

グループごとの打ち合わせ（4～5回、各40～60分）の際には、グループごとに複数のICレコーダーと1台のデジタルビデオカメラを用意し、録音・録画を行った。フィールドワーク実施後、口頭発表の準備をグループで行い、結果をグループごとに発表させた。発表の際には、参加者同士による相互評価を行い、発表者には評価表とコメントをフィードバックしている。また、毎時間の打ち合わせ終了後に提出させる「振り返りシート」や授業終了後のレポート及び「終了後アンケート」を回収し、分析・考察を行った。なお、音声の録音データについては、文字化作業を行った。さらに一部の参加者にはフォローアップインタビューを行った。

#### 4. 研究成果

ここでは、本プロジェクト終了後に参加者から回答してもらった「終了後振り返りシート」の結果について主に留学生の側からの考察を取り上げる。

まず、本プロジェクトに対する参加者の期待やプロジェクト開始前の意識については、特に留学生は「日本人学生との接触・交流のよい機会」だと肯定的に捉えている学生が多い。短期交換留学生として来日している学生にとっては、留学しても実際に日本人学生と交流・接触する機会は多くないため、本プロジェクトは留学生にとってもニーズの高いものであると考えられる。

また、参加者同士のコミュニケーションについては、程度の差はややあるが、相互にコミュニケーションがとれたという認識がしつつも、プロジェクトへの参加の積極性という点では、日本人学生側の態度があまり積極的ではなかったと感じているものもいた。この留学生は、本プロジェクトの市内見学やインタビュー活動については非常に肯定的な評価をしているが、一方では、日本人学生と

留学生が協働でプロジェクトを実施し、学ぶことに疑問を抱いていた。また、本プロジェクトの打ち合わせ以外の機会に、同じグループの日本人学生と会う機会がほとんどなかった点もやや否定的な評価につながっていると思われる。

本プロジェクトの効果の面では、参加者が共に市民として居住している鹿児島市の市内見学を、協働的・体験的活動として行ってことにより、地域理解や文化理解が促進されたり、認識が変化したのではないかとと思われる。特に地元の人にインタビューを行ったことにより、単に知識や情報を獲得するだけではなく、鹿児島の人々への理解が深まったというコメントも見られた。

さらに、情意面としては、準備・調査・発表・レポートという一連の活動に対して、終了後に達成感や満足感を感じているコメントがいくつも見られた。またそのような達成感や満足感は、協働的・体験的活動の効果でもあると認識しているものもいる。このような達成感や満足感などの情意面での効果が、今後の学習の動機にもつながり、意欲が喚起されたものもいる。

一方で、今回のプロジェクトは日本語能力の向上を主な目的としているわけでないが、準備段階で日本人学生と日本語を使用してコミュニケーションをとり、インタビューや口頭発表、パワーポイント作成などの様々な場面で、日本語を使用しているため、「日本語能力の向上」にも役立ったと認識しているものもいた。

以上のように、留学生にとっては地域・文化理解の促進のみならず、さまざまな効果が見られた。しかし、今回のような多文化間プロジェクト型協働学習では、1学期限りの活動のみとなり、その後にグループが継続して活動が行われているわけではない。今後、参

加者から得られたコメントなどからより効果的なプロジェクト実施の工夫が望まれる。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

中島 祥子（鹿児島大学教育学部）

研究者番号：80223147